

笑ってごらん

第 570 号 H. 28. 12. 13 発行

～今日のことば～

自分でこんな人間だと思ってしまうと、
それだけの人間にしかたれないのです。

(ヘレン・ケラー)

◇◆年末が近くなると何だか世間が慌ただしい。ケーキやプレゼントなどクリスマス商戦が激化し、続く正月に向けておせち料理とかその具材などの案内も多い。ボーナス時期でもあるのでなおのことだ。「歳末バーゲンで余計なものを買ってしまった」話も聞くことがある。世の中の景気回復のためには国民が気前よく財布を開く必要があるのだが、そうは言っても限りあるお金。十分気をつけねばなるまい。 ◆人間の欲というものは困ったもの。横領や脱税などお金にまつわる暗いニュースを新聞紙面で見かけることがある。さて、突然だが、次の文章の下線部の言葉の語源は何だろう？ 利益に①サバを読んで②ピンハネする③アコギな奴がいる。一方で、④ドサクサに紛れて、そのお金を⑤ネコババする者あり。そんな犯罪も実は第三者の⑥サシガネかも知れない。悪事はいずれ露見するもの。犯罪者は⑦あげくの果てに⑧オケラになり、厳しい責めを負う。しかしながら、⑨せっかく反省しても、復帰後かつての悪い仲間に唆されて再び悪の道へ。これでは⑩元の木阿弥である。…何事でも誠実が一番である。録り溜めしていた刑事ドラマ『相〇』ばかり観ていたら、こんな文章が思い浮かんでしまった。細かいことが気になるのが僕の悪い癖…。



感謝道

◇◆↑の語源についての解答。①『サバを読む』とは、いい加減、正確さに欠くこと。サバ・イワシ・サンマは安価な大衆魚。とくにサバは年中獲れる。よってその扱いはゾンザイに。市場では一山いくらの世界。こうなると数も適当。鯛は一尾、サバは一山。だから実際は26尾であってもサバを読んで30尾となる？ ②最初から最後までを『ピンからキリまで』という。ピンは頭のこと。その頭にあたる分をはねるから『ピンハネ』。③『アコギ』とは阿漕、伊勢湾の阿漕ヶ浦のこと。昔から伊勢神宮の所領で禁漁区。ここに漁師の男が母の病に効く魚を獲るため繰り返し忍び込み、ついに発覚、死刑となる。つまり、悪事も度重なればバレる意。④『ドサクサに紛れる』とは混乱に乗じること。ドサは「佐渡」の倒語。『ドサまわり』とは「佐渡のような遠い地方まで訪問する」こと。佐渡に金山が発見され、無宿者・犯罪者・博徒らが強制的に狩り出されたことを「ドサを食った」、つまり「ドサクサ」と。⑤ネコは大便（ババ）をすると、後ろ足で砂をかける。そして素知らぬフリをする。このネコの習性から「平然としたさま」を元々『ネコババ』といった。⑥『サシガネ』とは演劇用語で黒幕のこと。舞台上で蝶やトンボ・鳥などを飛ばすとき、それらに針金をつけて舞台下で操る。この針金状のものをいう。⑦連歌は室町期に始まった。表題を出して関連する句を挙げていく遊び。最初の句が発句。次が脇、以下、三句四句と。そして最後が挙句（あげく）。これですべてが収まる。だが、そこに「果て」がつくと、「収まらなかった」意になる。⑧『オケラになる』とは、所持金ゼロになること。ケラを捕まえると、その前足を大の字のように大きく広げてもがく様子から「お手上げ」の意。⑨『せっかく』折角。骨折り。後漢の時代にある男が雨に濡れ、かぶっていた頭巾の角が折れた。それを見た人が「かっこいい」と、ワザと角を折った。ここから当初「わざと」の意に。⑩『元の木阿弥』とは、苦勞して頑張ったが、結果は以前と変わらない、いや前よりずっと悪くなったこと。木阿弥は人名。大和の武将筒井順昭が病没。僧侶木阿弥が影武者に選ばれ、その死を隠した。だが、息子順慶が長ずると、もうお払い箱。失職。「元の木阿弥だ」と寺に戻ろうとしたが、誰にも信用されなかった。…私自身、調べてみて勉強になった。